

探訪 北の風景 116

ニッカウヰスキー余市蒸溜所 後志管内余市町

青木和弘

摂津酒造（後に宝酒造に吸収合併）からスコットランドに派遣され、大学で有機化学と応用化学を学び、ウイスキー蒸留所で研修を重ねて帰国、ウイスキー蒸留の詳細を報告している。その後、現在のサントリーの前身である寿屋で29年、日本初の本格ウイスキーを誕生させたが、当時、模造ウイスキーの甘い味に馴染（なじ）んだ日本人の口には合わず、まったく売れなかったという。

竹鶴が選んだ余市は、スコットランドとよく似た気候風土を備え、水質の良い豊富な水がある理想の地だった。ただ、最初の工場にはウイスキーの蒸留施設はなく、リンゴ農家から、傷などがあって売れないものも、どんどん引き取って、リンゴ果汁100%のジュースを生産した。ところが値段が高いせいもあって、なかなか売れず、変色するので返品が山になった。

当時、筆頭株主の加賀正太郎社長（加賀証券社長）がこのときのエピソードを記録に残している。混濁した大量のジュースを捨てるのはもったいないので、竹鶴の案に従って蒸留機にかけ、ブランデーをつくることにした。翌年に蒸留器を設置したが、リンゴの収穫は秋だけなので、そのあと休ませておくのはもったいない。そこで大麦でウイスキー蒸留を始めたのが、余市でのウイスキー製造開始の経緯だという。経営が軌道に乗ってからは始めるつもりだったが、背に腹は代えられなかったのだろう。ブランデー・ウイスキーの醸造免許を取得したのは会社設立から2年後の36年8月である。



重要文化財が建ち並ぶ工場建造物エリア。コロナ禍以降、見学は予約制で、ガイドが施設を案内してくれ、無料の試飲スペースも利用できる。所要時間は試飲を含めて40分ほどだが、ニッカミュージアムやレストラン、売店などは予約なしで利用できるが、見学エリアは予約者以外は立ち入れない。博物館には有料の試飲コーナーがある

余市は北海道の西部、積丹半島の東の付け根に位置する人口1万7273人（2023年10月末現在）の町。縄文時代早期からの遺跡があり、古くから人々の暮らしがあった。気候は北海道としては温暖で、積雪は多いが気温はマイナス10度以下になることは少ない。明治初期に米国から導入したリンゴやブドウなどの栽培を成功させ、道内を代表する果物の産地であり、ワイナリーも多い。

「日本のウイスキーの父」と呼ばれる竹鶴政孝（1894-1979年）が余市に「大日本果汁株式会社」（略称…日果）の工場を設立したのは1934（昭和9）年、40歳のときだ。日本が国際連盟を脱退し、戦時色が色濃くなってきた時代である。

竹鶴は、広島県の竹鶴酒造の三男。大学卒業後、

ともあれ、ウイスキー第1号「ニッカウヰスキー」が40年に誕生した。ここからは運が味方した。ウイスキーが統制品になり、「大日本果汁」は海軍の監督工場になった。当時、スコッチウイスキーの国内最大の消費者は帝国海軍で、イギリスからの輸入が途絶えたため、国産ウイスキーの需要が高まり、将校への配給用の酒を製造するため、優先的に原料の大麦が割り当てられ、事業の継続が可能になったのだ。

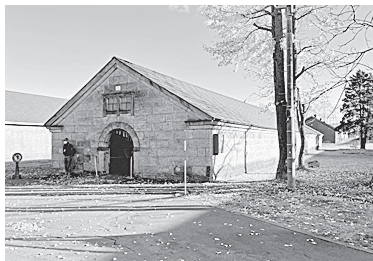
ウイスキーの風味に大きく影響するのは、ピートの香りが付く精麦作業と石炭の直焚きでできる焦げの香りが付く蒸留作業、そして貯蔵に使う樽の種類と熟成期間だといわれる。海に面した寒冷な気候がもたらす独特の環境が、余市蒸溜所のウイスキーに深い味わいをもたらし、受け継がれてきた伝統技法によって、いまも力強く濃厚なモルト原酒を生産し、世界からジャパニーズウイスキーの代表格として高い評価を受けている。





モロミの入った蒸留機（ホットスチル）を石炭で直に熱し、水とアルコールの沸点の差を利用してウイスキー成分を抽出する。2回繰り返してアルコール63%のモルトができる。ホットスチルの底のモロミの焦げが風味に加わる

重要文化財の1号貯蔵庫。奥行きが50メートルある。同様の貯蔵庫が27棟あり、原酒の樽がぎっしり並ぶ



原酒の樽はアメリカンオークやチエリー樽などさまざまな種類があり、長い年月で独特の風味が生まれる

会社創立時の敷地面積は現在の10分の1ほど。工場建物は敷地の東側に13棟がたまって建てられ、蒸留工場が完成したのは36年だ。出来あがったばかりの原酒の貯蔵のため、火災の恐れがない敷地南西側の中島に倉庫を建てた。敷地には余市川の蛇行跡の水路や中島があったのだ。

2022年に国の重要文化財に指定されたのは、建物の正門と左右に翼を広げたように連なる事務所棟、大きな三角屋根が並んだふたつの乾燥棟、蒸留工場、1号、2号貯蔵庫など10棟だ。指定の理由は、「地域の歴史を伝える工場敷地に並ぶ建物が、創業当時の趣に統一されていること等に歴史的価値が認められる」というもの。

今でもここに年間数十万人もの人々が訪れるのは、単にウイスキー工場の見学や無料の試飲に惹（ひ）き付けられるからではなく、竹鶴が具現化した、ウイスキー造りの理想郷の魅力なのだと思う。